

2279

海日奇觀

壹

續日奇觀



珠光紹路が空を渡り一葉葉の箱が急須を
 取あつくり風流も好くきれごとく一路居士が手
 とり蒲小難炊を禁一犬隠れあはれ唯三年
 未味曾汁を煮もろが故不達屋の困庵小自空の
 物を後家平波なつりく未骨汁を煮朝夕
 あふ是を喫りて大事は御恩深を悦父母の高志を
 思ひまき不似よあきふは句と 白川彦の御賢

あり一自空物小手蒲の園を拳一席の上葉
 揚げたあ我を惜む者の人稱して平蒲菴と
 喚ばり過頭別後一々名を未骨志尚材一揮と傳
 名に其時の歌歌ふまつくよくわは未骨汁皆を
 了そ出行やあや一れまふあま一徳尚葉
 の風俗を慕ひて月一日の汁襟を催一友人を
 聚會古今の説話を穿一其奇一書成書
 止免編集せん事欲は衆客這日を禱日と

よ。ちの茶はお飲ぐ。月草の定日戌釜日とつや
准ち。原末節儉を専ら故に愚老ハ汁一
我葵の余他食我設けは来友心お任せ。飯
食せんと飲する者の余當食氣を携へ酒飲嗜ハ
雖亦尚を肩お掛来り。終日快活劇談
ふも或月此補日書録其垣根筆しよ即本
子雲我懐ち一来是と向這書開版より
年我強今知人稀なれば敢く索ふと
○ 二

意の書題改更之を。自然事新ふし
書よ弘まる緯を以ん希く回奉此外題を更
あつとて。是は閑居お其作者の姓名保
まといども其載るとん。成古今此送事。幽眞靈
異の憚。誠手席上の奇観と云へ。原是は驚
ふ心は。そせ。娘んを今更えん。礼なきお似たりと
固く静めども強台。題を更わらふ。壇木花
喜ぶ知るを。得は故人筆。是は恨心やと兼列

ざれば止やむはなはたえとて取とる教あは此こゝ日をかるごとくて歸かへ
日し奇き觀くわんと題だいとあるあらうとてそのゆゑを述ゆんとて
衆しゆとしきあがものあらうの端は徳まふ水みづ華は
弘化四年、末の仲秋

鶏鳴舎曉鐘成

汁滓席上ま我わ名な

未曾志尚材一禪



錯日清談家
會合之圖



月毎小け構
 とろくそ茶流儀
 主下味飲けと
 意て未茶遊す
 てしたるよ茶と意の
 かりある儀とてなる
 日け六つ一儀飲くとて
 ゐるう儀飲くとて
 ありたり茶遊といふと
 月毎にかつるのあくま
 風儀の友とて
 真田耕處高松東一
 上田翠砂安部友
 澤春耕書肆松雲堂
 多る事も集ひて御善徳
 清談家といふ人といふ
 ころそ茶をやる客もの
 長を記す

○天明八申辛五月白川彦上京の時伊勢路少くある民家に憩ひぬいし。
其家の床小一軸あり。自在鍵小鍋をかけ人々打とを何う烹飪乃ちその
畫ありければ侯と云うる條筆して

此の屍日よこ度焼けば天下平なり。焼ざる時ハ民々一む焼ざるまがたり
少一。こころに焼バ家と亡が久高屋の沖製も此の屍より出さる貴賤
貧富も此屍よあり

と云ふは下より上より少ありひびて世の人皆ハ自在鍵なり
と賛一なり。世上風説集に見へ尚志賀翁の三省録にも載りれど
まば世人よく知るところあれども予是を深く信ぜんと以て強てあつし出

け構の事

○落穂集と云むるハ屋敷めぐり家居ホの美もあひあく何ぞ者の二種も

求^{もと}めんと夫^{おとこ}とけし申^{まを}す。近^{ちか}所^{ところ}らうら心^{こころ}安^{やす}に相^あ番^{ばん}えん人^{ひと}とす。飯^いと
食^くははに膳^{ぜん}枕^{まくら}をそて面^{めん}の宿^{やど}許^{もと}ら持^もつ。つと後^{のち}あひ申^{まを}する事^{こと}とれ
ら其^{その}會^{かい}合^{ごう}と名^な付^づけ構^{かま}と申^{まを}す。今^{いま}時^{とき}の振^か舞^{まひ}も同^{おな}事^じと事^{こと}ととこ。挑^た源^{げん}遣^い
事^{こと}おむ。世^よに構^{かま}ら。支^しらうて客^{きやく}と請^{まを}するに其^{その}客^{きやく}おと。旅^{たび}と飯^いとらん
は。言^いひの搦^なへ携^かへ来^き。事^{こと}主^{しゅ}六^む口^くに一^い屯^{とん}の。製^{つく}り終^{しま}時^{とき}分^{ぶん}にけと鍋^{なべ}乃^{なり}
ち座^ざ鋪^ぽ持^もつ。打^{うち}らうて賞^{しょう}味^み。其^{その}外^{ぐわい}に何^{なに}のりてあ。事^{こと}一^い箇^こも
り。の。の。も。鳥^{とり}の。へ。の。心^{こころ}せ。後^{のち}世^よに奢^{おご}り長^{なが}。分^{ぶん}限^{げん}ま。子^こに花^{はな}羅^ら此^{こゝ}岡^{おか}
らう。と。らうて。西山^{せいざん}公^{こう}並^{へい}御^ご物^{ぶつ}結^{むす}あ。せ。れ。に。構^{かま}再^{また}鳥^{とり}せ。自^{みづか}ら奢^{おご}りも止^とむ
る。く。ら。作^{あそ}ぶ。れ。ら。馬^ば込^こ臣^{しん}に。構^{かま}と。順^{したが}ひ。鳥^{とり}行^いら。ば。申^{まを}合^ごと。見^みらう。
其^{その}余^{あま}風^{かぜ}今^{いま}尚^{なほ}あ。彼^{かの}野^のに存^{ぞん}。と。其^{その}名^なの。傳^{つた}へらう。就^た中^{ちゆう}京^{きやう}洛^{らく}の。町^{まち}と。て。例^{れい}奉^{ほう}
早^{はや}春^{はる}町^{まち}に。祢^ね町^{まち}の。會^{かい}合^{ごう}始^{はじ}め。ら。其^{その}式^{しき}町^{まち}内^{うち}の。長^{なが}と。始^{はじ}め。町^{まち}人^{ひと}に。統^と會^{かい}野^のに。住^あす。

往昔武家方
汁講之圖

とろろあが

往昔武家方

やれやれ

物のつれと

あつ練り

青坡



自在ノ鍋次
何れも画の賛

月も花も

やれやれ

秋の赤く満ちる

も降氷るもかきも

樂し樂し

自在のり

湯の尻

辛りの夜

紀伊桃林



公より俾出さるる所の法令あはむ其町にて定む置所の按おと数箇條よりこれ
 岡も僅で兼知の式よりつて後食宴をおひ時小會合の録も我宅より膳扱飯菓
 中ても携り来りて食は當屋よりハ一汁と調味とて出は當時の其風なり町も有
 是もまん古代の遺風あるべし又浪華の市中小於ても以五十年をより以前はハ
 町人系會とおすと汁糸會と稱し老人の物語あり今ハ曾く其事と聞は
 櫻洲住吉の里におつて春毎小あつり溝と号けて里民打集りて宴とらひしはれ
 も全く汁溝の傳（おきき）にまゐるあつらん秋尚汁（つひ）の祝結（すづめ）は鑑（かみ）は備（び）終（はら）は加（か）て編集（へんしゅう）

鑑日清語

曉鐘成撰集

全部五卷

近刻

一の巻

深草の翁相字の御地敷と知事
伊友多乃中重衛の娘と冥婚
極能正連荒田乃祠と塔

二の巻

在原業平丈海に託く室と新
宣明義伊と禱く石山に隠る

三の巻

靱暗宗文婦再生の縁と縁
宇野六郎陸寺の怪にまふ

卷之二

四の巻

小櫻奇縁にちん貴子と彦
山村子孫九世同病忍の字と守
長産鍼後の娘

五の巻

松村兵庫吉井の娘後
千載の班狐一條を鬮と試む
環人見と長澄と激々翁と貞と

以上十三條

深草の翁桐字の御地奴と号す

元弘の頃山城深草の里土人の徳まのり常に幼少して中野と
 号せり相字の桐をうりて一歳と乞其舅の擢はまは又桐と
 かどとんその桐大字の点画とくくろく吉出禍福とつたやも
 差してや其舅人姓名とくくろく深草の公羽とのいびやうえ
 弘建武の乱に畿内最争乱の境と成四民その土とやんむる茅
 あり公羽もいづらとれと避てりんちやうとくくろく曆應の頃より都
 もくろく静かんとは翁又幼少出するやうのくくろく人其
 幼の妙多くとくくろく桐と号する者多し上皇具名と号せり
 朝の字と云は面とくくろく公羽桐字をくくろく翁僅よりえりて云是

卷之二

官の書くはわは朝の字ワノヤと十月十日の字ありきも
 日月とたやすし方字あまは此月日降誕くくろくこのころ
 ありあの人ありされも日小けて月又あるとくくろく六
 位ととり居るえあやとくくろく北面地出て此と考をわ
 の所かされ毎い字と桐字をくくろく其か伺候の人く女房達くくろく
 一字とくくろく桐下むくくろく略其たけくくろく論ありくくろく不
 あり上皇廿五歳よりい時一領も固き貴をくくろく物言高唯一字毎
 に一歳とくくろく其外とありて上皇もくくろく其喜欲ありて
 足より朝野其長く都下とくくろくたけくくろく一日細川家の館
 諸大名等え頼許のくくろくてあ桐の程多くとくくろく人のくくろく
 くくろくと括て桐とくくろくとくくろく足館の土頼之春の字とくくろく

春の字柄とて人の日あり君後來三人の隠しとあり威權各
 日の界ごとくおんされども君より先此字とてまき一々の字家のけは
 けえ威權君の法わん但ども教者のためは覆ひまをさる日月
 の蝕とてと速きなりとどとまきと慎なるとありて
 塩治利信なる定も成りわけて大の字を以て相とてしむる人乃皇
 一難を傳ふ加て大と成今女とてす君さう作ん字とて一
 々一とて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 下りとて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 又び草とて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 びす果て頼之新波留とて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 もわらふ西園園の現空存りて威權各とてのふりて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人

よりて遺責とて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 其妻よりま安をて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 ながとて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 深の字とて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 ぞとて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 かくとて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 枯骨死はとて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 八日とて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 松浦に集る本連といふもの左京たりて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 子かし奉りて松浦に集る本連といふもの左京たりて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人
 系のらといふも將軍空の疑いかりて一と加ふとれんとあり女と海へ娘とありの福婦人

善^{ぜん}に^に折^せしも^も妻^{さい}姓^{せい}娠^んく^く巳^い辛^{しん}二月^{にがつ}の^の節^{せつ}も^も女^{にょ}ども^{ども}方^{かた}供^{たか}の^の名^なを^をか^か
女^{にょ}近^{ちか}名^なと^と振^ひて^て書^かき^きて^て也^やの^の字^じを^をか^かり^りて^て又^{また}個^こを^を求^{もと}む^むる^る也^やの^の字^じを^をか^か
り^り助^{すけ}諸^{しよ}あ^あま^ま是^{これ}必^{かならず}君^{きみ}内^{うち}助^{すけ}の^の書^かき^きて^て又^{また}女^{にょ}ども^{ども}也^やの^の字^じを^をか^かり^りて^て又^{また}下^{した}に^に
二^{ふた}画^え添^そち^ちを^を添^そて^ても^も子^こ怪^{あや}多^{おほ}く^くす^す一^{ひと}あ^あま^ま一^{ひと}女^{にょ}近^{ちか}名^なの^の朝^{あさ}に^にか^かき^き
あ^あま^ま後^{のち}の^の詳^{しょう}あ^ある^ること^{こと}を^をこ^ころ^ろん^んな^なる^る也^や水^{みづ}わ^わま^ま池^{いけ}馬^{うま}の^の名^な馳^ちと^とあ^ある^る今^{いま}
池^{いけ}水^{みづ}を^を馳^ちる^る馬^{うま}あ^ある^る君^{きみ}必^{かならず}進^{すす}退^{ひき}す^すは^は弟^{あに}たり^りす^す一^{ひと}次^{つぎ}や^や人^{ひと}を^を添^そて^て他^{ほか}と^とあ^あ
ま^まあ^あま^ま地^ちあり^り今^{いま}人^{ひと}と^とま^まと^とこ^ころ^ろ君^{きみ}親^{おや}属^{ぞく}地^ちは^は誰^{たれ}と^とあ^ある^る一^{ひと}こ^こに^に
ども^{ども}也^やの^の字^じ諸^{しよ}の^の事^{こと}あ^あつ^つて^て女^{にょ}ども^{ども}の^の名^なを^をか^かり^りて^て又^{また}一^{ひと}差^さこ^こと^とあ^あら^らず^ず一^{ひと}書^かき^きて^て又^{また}一^{ひと}画^えの^の下^{した}に^に
一^{ひと}画^えの^の下^{した}に^に必^{かならず}一^{ひと}月^{つき}に^にて^て出^でる^るあ^あま^ま一^{ひと}只^{ただ}一^{ひと}の^の奇^き怪^{かい}す^すと^とあ^ある^る故^{ゆえ}に^に



休まると論ぐん 居あふとがさうしむ 忘たまるは是と云りん也の字法と如
 て地と云今賢室の存多ふ云く 地奴あり連は其奴と拂いたすは安
 穩ありしと云ふ友近ふは是と防之の術と云ふ羽之奴初為術
 わり試を用い多と云門前に出やうなむは中と擇りて一封の書紙
 出東流水は之朝は服したるを去るわ平と行さるは行て云ぬ
 こ身と用りし案のこく之目と云云 腹中雷鳴痛楚しく小地敷手と
 云はた敷男の後跡存た氣分後て平日は此はれやと 將軍家の不意
 こん身えんくはえ前功の當りあはる友近 謝儀と云こさむためあま
 をたらぬ 氣迹と云さるる人あり遂はよの終ると云と云は世の人その術
 と云ふんくこさるるものなきが術の好むと云く 井と不許と云はるは
 たすくわてふも幸しあると云かて 佛ざりし 魚を佛と供ふる者ありしと云

かゝるはびおらわつてはさういふまゝにさへあるは東の徳の風は故内府も
くもさへをさへしとてさへなほは物ら所りては化んやとていふ
うら小狐路の本曾の源山より雲をいへて一貴のやうにう程とわ
れま主上門院とてうたはせり門の人々をさへさへまへ出さへせむも
此の方にはややとてさへゆはせとてまじと名張ははぬ有羽の月の夜
還すの時とてさへさへさへなりはとてさへく須磨の内裡もさうは
いとの熱いさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
つわよは五事無きほどの時ありまこととてはさへさへさへさへさへ
なる西國のほりともさへ井の清まりのなほさへさへさへさへさへ
てまじ親のさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
にさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

の果もさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
らる者もさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
かゝるはびおらわつてはさういふまゝにさへあるは東の徳の風は故内府も
くもさへをさへしとてさへなほは物ら所りては化んやとていふ
うら小狐路の本曾の源山より雲をいへて一貴のやうにう程とわ
れま主上門院とてうたはせり門の人々をさへさへまへ出さへせむも
此の方にはややとてさへゆはせとてまじと名張ははぬ有羽の月の夜
還すの時とてさへさへさへさへなりはとてさへく須磨の内裡もさうは
いとの熱いさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
つわよは五事無きほどの時ありまこととてはさへさへさへさへさへ
なる西國のほりともさへ井の清まりのなほさへさへさへさへさへ
てまじ親のさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
にさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

若くは父傳の中へはつとをけいわをてまふか余と
けりたりともは見え父母にもわりば身をとお語く弁らんはまふ
の御とも傳はた見え又原の中へ暮るまふとくまふわつと見え
その夜傳は身まりぬ父母との言ふあごくと又原はまふくまふ
の傳とやといふ二人の善投とゆへりまふりやの夜おふまふり姫
りまふりや其のまふりまへ見え又原のまふりやの清水おふあふり
はくまふりやそのまふりまふりまふりまふり父母あふりまふり
萬法華書はまふりまふりまふり功徳とゆへりまふりまふりまふり
たる者もわりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり

鹽飽正連荒田の祠と塚

實の頃皇原將監氏豊とてあわりの肥常の考はてまふの二族

や〜〜累代一城のまふりまふり氏豊よまふり山谷門豪(勢)い傳う
し〜〜まふりまふりまふり隣國に争ひ〜〜時とゆるを應行(我)は細川に
属〜〜我功あつらん將軍(家)おはて在(京)たり〜〜は文明の
を細川(又)因(坐)の群雄も各國(ま)まふりて上下轄(く)静(か)んは(兵)を
細川(と)送り(山)塚(ま)ふりまふりまふり(別)當(舊)知(あ)れ
投(常)〜〜(舊)田(と)話(し)〜〜(淡)川(と)まふり(頃)ハ(伊)丹(月)の(二)村(兩)管(つ)こ
は〜〜(佐)田(あ)る(村)も(各)まふり(わ)りて(便)船(と)を(小)氏(豊)幸(と)船(と)也
て(其)姓(名)と(同)く(西)園(方)の(ま)ふり(荒)田(行)も(各)武(秘)兵(器)と
終(ま)に(其)の)辨(法)も(各)まふり(ま)ふり(小)氏(豊)と(血)交(わ)り(と)收(く)酒(着)と(各)
まふり(各)まふり(各)を(船)名(ま)ふり(ま)ふり(時)近(く)居(ら)て(各)家(に)誠(意)を
(富)田(の)まふり(ま)ふり(小)村(の)荒(田)の(考)と(呼)び(小)宮(宇)門(經)傳

わつとと近家の無事に繼一人修造の者あり其上土比卑澤より
て魚散毫とて店をけりふす凡の右石明去の彼池を下り多ふがしむら
の祠廟とありて舊觀より後をんとて家又その福徳を授助せ
り位より却るる訪多うさまもも神人路隔たまる僕後と
まらけて君人ありたりとて云畢て忽其形とて凡氏を奇
怪とせむともわれ一城の主とも多ふとて未頼もはむい居り
く其多もとて其聖多のま細川より河をわたり積石を下りて
軍勢とも助けて命を修り凡氏を神乃謂はれん今もえ達し銀
尊しく彼地にたりとて凡氏の富田の城なりか多ふ凡氏をとい
字々凡氏をといとて凡氏の朝の差いさすも服し荒田のまありと
る凡氏南二里餘にありて林あり荒田のまとて凡氏神のまありと

卷之

荒田に修りて故むらとて存すとも凡氏則案田と異なりかとも
多し誠し人家を離り二里餘にたりた水は沿石の園よりと
老樹まゝ修りて登りて蘆葦生茂りて路とて凡氏を神
乃幼のま僕後とてさま凡馬とありて凡二人路もあまを分行り
もを在りて路も修りてを額わるとも多しとて凡氏を
も凡荒田明神のまありとて凡氏額をさるとして後果すたり
行り二陣の風起りて水は控忍をともがて勸告ありてを修り
くも凡氏をわり則案多りとも凡氏あり凡氏豊比に依りて後助
りたり眉圓を聞きたりと謝とて神又物を失をさると称しとて
やうくともむとて西修りて社にたりて拜殿の基礎のまありと
り社と軒とありて修りて荒田多りとも凡氏傍の林のまあり

呀多とあるに誰と云は神云當國入江郷に塩飽正連と云ふあり
 其系に不教あり史此ノ轍多ク一多餘より小吏より余より其系と
 責しむる事多も宿債漸畢る云云目ものより大放還と云ふあり
 氏を忌懼しんその他と云ふ別と云かんんんに律又再と
 修造の事と託は氏曲豆教諾へ出より鳥居の多する送る律の
 その云々を云々は氏を城より云々類子修造を企むる事免
 ぐと云々も連多我多の云々近多荒多より修造を濫用たりといん
 ちと云々の様あり一夜思索しん息一討と云ふ出で翌日早具子
 塩飽が館より塩飽の一族多くことと云云連子より云云武威漸く
 強くしん細いも属は一方と云りハ氏を推て相見と云ふ物に
 臥病と云ふことと謝守氏を再三強て候やむことと云ふて病



座にありて對面を三連を系と云ふ多岐本疾より深就中時痛楚
 痛く身が困倦し余旦夕に及ぶる君何の議すとのりて駕と把
 たりて訪に氏を傷りて余系貴死の病との據とてあとしり
 後聊一言を進んた女子身もろ系系多異人しをて鬼神
 と驅役すの術粗さびんたり頃日城南荒田の森より彼神
 貴をの不敬と怒りて怪格とて呵責を加ふ系その痛楚とてう
 らおびせ此とて新は祖朝とて言へく罪を謝せむとてその怪格と
 てと疾とて平後ありてををををを神點頭して諾しぬ貴とて
 降んとし兩三日のりたわ平後領とて平後の後修造の事ありたま之
 かどとて女子三連依て諾し貴をのとて子後之とて又氏をその
 計のありとて依て降るとして二日とて云病とて余多て氣力

平見のごとく三連家の子印位と傳ふ之云生乎神明とわかれ
て鬼神とけりなる事新撰の事多岐の病荒田の神の由り
りしらく罪と誨せんは祠廟を再建せしと公室宗氏也か教
わたりて黙止せしむは似る事多岐荒田神事なるの眼の
れりし事多岐守に老人入て自ら修造の事と記を地
とて荒田の神あり事記と案にりし往多岐地に入敷す
まことなる圓何事ある事と教へ後猶於紫を中
其獨體とあり祠と建りしと老人元體と祈り其驗
ありし事、衛宮宇莊華、四時祭祀たりとありこれ
を國の宗廟社稷の神にもありしと記すとも、淫祠すん宗
ぶる理あり、此や連家の兵乱すん神祀佛圖其に

卷之一

荒廢しる事多岐と云は、民饑く圓用たりとあり兵
再建と記すは、國の民の愚あり、淫祠と奉りし、神祇
も傍に倍位の厚く功德と著す、無益の大和と建、空
閑地と用、民力と費、其に廢たるとあり、修造
せしむる事多岐、其後をりしと情ろく禍とあり、
神の民を保護する事あり、民の饑たりとあり、
と建、其を悟りし事多岐、神の公あり、
地とあり、祥事多岐、淫祠と壞、
の坂地すん事多岐、民の禍あり、除すん事多岐、
と果し、彼地より淫祠と壞、海に沈り、
中りて、事と燒拂、掃除すん事多岐、後室用すん事多岐、
氏を以て



氏をその平後と誓う且他道のまを促して三連祠と塔とを
 と累々諸に氏堂駐く面おのどく三連祠の利はきとや
 して悔らむとあり氏をすくすく初より三連祠とす
 まあま今更言ふありやと此後今もいへば
 二月付と徑て城外に備へ日暮がんと馬狩りまはれ
 松子白きと懸る所より刀を搦る馬前をかつたり
 ともくは荒田の神を眼と懸り罵て云汝信をさうた
 ち懸滅たつと云恨あま必報をなすと云たつと云氏
 を法に始末とがらんと云と謝生神顔をとけんと云
 威福盛んにて茶多の頼むわは家敵とさすまわは海
 命衰へ恨と報する時ありと云畢るえ忽との行所と云は

卷之一

僕後をなると其社と云氏をさすと云病と云餘りて
 遂に死に其子孫皆文作て門滅するもの三連祠と云
 と云後入道へ守敬齋と号く分餘りて死に族盛れ
 て世に其名をいへると云と云識し豪傑のよびと云

鑑日奇觀卷之一終